

これまでの疲れのたまった腰はとてつもなくだるく、いくら孔内がすっかり潤い、少年の腰が小さく軽いからといって、動かすことは簡単ではなかった。

その竿の根元には当然のように拘束具を嵌めなおされて、またも許可のない射精を禁じられている。

「ほら、はやく。孔のなかでちゃんと僕のを締めつけながらね」

「う…っ♡♡うう……っ♡」

悩ましい呻きを漏らしながら、少年はぐいっつと腰を持ち上げ、男の雁首のぎりぎりまで抜き去る。それから孔内を窄めるのを意識しながら、腰をゆっくりおろしていく。

「そう、そう……。それをもっと速くやるんだ」

「うう……っ♡♡ああ……っ♡ああ……っ♡♡♡」

命じられるままに、過酷な上下運動を開始する。

男のものは長すぎて、腰を持ち上げても持ち上げても、なかなか雁首のところまで行きつかない。はじめは下半身を力^{りき}ませて、ぬちゅっぬちゅっ、とテンポのいい水音を立てていた少年だったが、すぐに疲れて腰が落ちてきた。

「アああ……ッ！♡♡♡」

雁首まで行きつかぬうち下肢の力が抜け、ずちゅんッ、と図太い男の上に座り込んでしまう。

「う、うう……っ♡♡」

それでも震えながら、慌てて腰をあげようとしたのだが、どうしても足腰に力が入らない。孔内を引き締める力ももう残ってはいない。

「もうできない……？」

男の問いに、小さな肩がびくりと揺れる。

「で……っできる……っできる……う……っうう……っ♡♡う……♡」

下半身に必死になって力をこめるも、ただただその白い太腿が痙攣するばかりで、腰は前後にゆらめく程度だ。

「全然できてないよね？もっとお仕置き追加しなきゃダメだね」